

平成25年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	愛知県立熱田高等学校	氏名	早川 修平
-----	------------	----	-------

1. 印象に残る写真2点

●「サヤブリー青年海外協力隊の方々」



今回の研修でお会いした日本人の中でも一番印象に残った3人。とても明るく、魅力的な方たちで、私の目には本当にキラキラと輝いて見えた。今後もラオスの発展のために頑張っていたらいいと思った。

●「たくさん学び合った仲間たち」



本当に内容の濃い 11 日間であった。いろいろなことを一緒に体験・経験し、この先それぞれの学校へとその体験・経験を伝えていく。これからも同じ気持ちを持って頑張り、互いに支え合っていく最高の仲間です。

2. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は今までに海外に行った経験があまりなく、開発途上国についての知識はほとんどなかった。そのため、今までの私では開発途上国への理解は不十分で、授業で国際協力等について伝える試みをしてうまく伝えることができなかった。そこで今回の研修では、「現地の方とたくさん触れ合い、現地の生活を自分自身の目で見て体験することで、開発途上国の現状について理解を深める」こと、また、「本研修で得た知識や経験したことを生徒に伝え、ともに考えながら国際社会を視野に入れた人材へと育てる」ことを目的とし取り組んだ。

実際にラオスでは本当に貴重な体験を数多くし、ラオスで見るものすべてがとても新鮮で、今まで見たこと、感じたことのないような発見をすることができた。中にはとても大きな衝撃を受けるようなものもあったが、それも含め本当に内容の濃い研修となった。現地でお会いした日本人の方々も本当に魅力的な方ばかりで、

是非ともこれからの授業実践で彼らの活躍を伝えていきたい。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ラオスで一番大きく感じたことは、時間の流れの違いであった。日本では「もうこんな時間か」とよく口にしていたが、ラオスでは「まだこんな時間か」と口にしている自分がいた。ラオスでの研修は本当に充実し、毎日起こる驚きと発見に高揚していたが、それでも流れる時間はとてもゆったりとしていた。これは、ラオスの人たちの国民性や生活、文化・歴史など様々な部分での良さを自然と感じていたからだと思う。あなたの大切にしているものは何ですか？と尋ねると迷わず「家族」と答えるととも家族思いなラオスの人たち、写真やビデオ・インタビューなど何を頼んでも「ノー」とは言わず快く了解してくれるとても優しいラオスの人たち、自動車が泥濘にはまってしまい渋滞しても怒らず手助けをしに行くとても温かいラオスの人たち。そんなラオスの人たちから日本人は多くのことを学ばなければいけないと思う。日本人がいつの間にか失ってしまったもの、まだ気付いていないものをラオスの人たちはしっかりと持っていると感じた。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

今回の研修で一番強く印象に残っているのは、サヤブリーで出会った青年海外協力隊の3名の方々である。他のラオスで活躍されている日本人の方々にも共通して感じたことであるが、みなさん本当に輝いて見えた。目標に向かってまっすぐに向かっていく行動力や姿勢、ラオスのために何かできることをしたいと願う強い意思や想い、活動に際して困難や苦悩がたくさんあると思われるが、それを感じさせない明るさやバイタリティ、どれをとっても私にはとても魅力的に感じた。また、「日本の子どもたちはもっと外の世界を見た方がいい」「日本人はもっとアグレッシブにならなければいけない」とお話していた方もいた。今回の研修で私はラオスを見て、経験した。本当に驚きと感動がたくさんあった。この経験は是非とも日本の子どもたちにもしてもらいたいと感じる。これから私は学校で授業実践を行っていくが、生徒たちには視野を広げることの大切さをしっかりと伝えていきたいと思う。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

ラオスでは焼畑移動耕作などの原因によって森林減少が進んでいる。そこで森林減少を抑制するためにJICAではラオス森林減少抑制のための参加型土地・森林管理プロジェクト（PAREDD）が始まった。この活動についてJICA 専門家の方から「焼畑は悪ではなく、一種の文化である」、「移住や強制排除をするのではなく、新規に行う焼畑の抑制を誘導していく」というような話を聞いたときには大きな驚きがあった。森林減少の原因が焼畑であるなら焼畑はすぐにでも止めるべきだという考え方では、これからの現地の人たちの生活が苦しくなる。現地で生活している人たちが生活に困ることのないように、そしてこのプロジェクトが終了しても残した仕組みが住民だけで運営していくことのできるように活動していくことが大切なのだと学んだ。

また、村での集会の様子を見学させていただいたとき、住民がノートを持って参加していることに「参加型」というキーワードを感じることができ、これからもこのようなプロジェクトが広がっていけばいいのにと感じた。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAは様々な支援活動を行っているが、どれもが「日本のスタイルの押しつけ」になっていないことが良いと感じた。どの支援活動を見ても日本独自、先進国のやり方を途上国で教え、行っているのではなく、途上国のスタイルに合わせた、途上国の文化や歴史を活かすようなやり方で支援しているのが感じられた。今あるもので最大限の効果を発揮させる。そして、支援が終わった後も住民だけで継続して続けていくことができるように活動しているのが本当に素晴らしいと感じた。

そして、それらの素晴らしい活動が日本にいるときにもっと知ることができれば良いと思った。日本にいるとき、私はそれらのJICAの支援活動を知らなかった。これらの素晴らしい支援活動をもっともっと広めることができれば、国際協力に興味を持つ人たちが増え、また別の支援が多く途上国に行きわたるのではないだろうか。今後、JICAの活動を知ることのできる機会がさらに増えるといいと思った。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

持ち物 ⇒ 極力使わないであろうものは持っていかないことをお勧めします。衣類も3~4セットくらいあれば自分で洗濯やホテルのクリーニングを利用すれば足りると思います。タオルもホテルにありました。空港で「重量オーバーだー!」なんて言って慌てて手荷物へと積み替えるよりはなるべく行き荷物から軽くしていった方がいいです。

必要な準備 ⇒ 現地で子どもたちと交流をする機会があるので、その際に何か交流ができるものを持って行った方がいいです。(折り紙、新聞紙、けん玉など) 日本の写真(家の周り、学校など)をファイルにして持っていくと便利かと。言葉についても現地で通訳とガイドがいますが、ある程度は話せるように日本で覚えていった方がいいと思います。挨拶、自己紹介、写真を撮ってもいいですか?などラオス語で話せると良いと思います。あと必要なものは健康な体です。現地での研修はかなり体力を使います。たくさん歩きます。なかなか耐えられない環境で過ごすことになるので、健康な体は一番必要かと…

学びの視点 ⇒ 現地でインタビューやアンケートをする際には、必ず日本でまとめてから。インタビュー内容もアンケートも事前に作っていくとベストだと思いますが、今回ラオス語のアンケート作成をインターネットのある無料翻訳サイトを使って作成したら、現地の通訳に「ダメだ」と言われました。インターネットの無料翻訳サイトではまだまだ完全に翻訳できないので別の方法を使うことをお勧めします。

注意事項 ⇒ 研修中はしっかり学び、休めるときにはしっかりと休む。無理はせず、何かあればすぐに申し出た方がいいと思います。それと1人で研修に行くのではなく、最高の仲間と一緒にいきます。大変なときは一緒にいる仲間を頼りましょう。そして、誰かが大変そうなときは支えてあげましょう。

6. その他全般を通じての感想・意見など

今回の研修でお会いした現地で活躍されている日本人の周りにはたくさんの笑顔がありました。私はその笑顔に本当に元気をもらいました。日本でも同じような経験をたくさんしてきました。「笑顔は人に元気を与え、人を幸せにする。」このことは日本でもラオスでも同じなのだと感じることができました。

そして、その笑顔の力は今回の研修と一緒にいった仲間からももらうことができました。ラオスのことをた

くさん学び、その学びを伝える方法を体験しながら学習する研修ですが、仲間の大切さというものを改めて感じることでできる研修でもありました。

仲間だけではなく、この研修を行うために本当にたくさんの人の支えも感じることができました。

本当に多くの方に感謝しています。ありがとうございました。

以上